

童話『モッコちゃんのコーヒー店』（後編）

二十三回生 黒澤（保富） 琉美子

【前回のあらすじ】

五十年もいっしょに暮らした愛するおじいさんを亡くしたひとりぼっちのおばあさん。毎日泣いてく
らしていたが、ある日、おじいさんが絵をかくときに使っていた、ジャンパーでモッコちゃんというぬ
いぐるみのねこを作った。そして、むかし、おじいさんとそうしていたように夜の八時にコーヒー豆を
ひいていると、不思議なことがおこった。まずさいしよは、ドアの上にかかたおじいさんがかいた絵
「春の風」の中の女のひとのようなやさしい女性がたずねてきた。実はこの絵のモデルは、わかいころ
のおばあさん。次にその絵を八才のときに海でおぼれてなくなった娘のゆう子の絵に変えると、ゆう子
がたずねてきた。そして毎日やってきてくれたが、ある日からまったく来なくなってしまった。

おばあさんは、また、ぼんやりなみだぐむ日が多くなりました。

庭のコスモスの花も散り、冷たい風が木の葉をからからとならす季節になっていました。

モッコちゃんのコーヒー店も、いつのまにかやめてしまいました。おばあさんにとっては、モッコ
ちゃん相手に、ぶつぶつひとりごとをいうのが、ただひとつのなぐさめでした。

あるばん、おばあさんは、モッコちゃんをひざにのせていいました。

「おまえも、お話しが出来るといいのにな」

そして、じっと、あどけないモッコちゃんの顔を見つめていました。すると、ふともう一度、別の絵
をドアの上にかけてみようという気持ちになりました。それは、わかいころのおじいさんのしょうぞう
画です。

次の日のばん、おばあさんは、少しおめかしをして待ちました。

ぐる、ぐる、ぐる。ぐる、ぐる、ぐる。

八時に、おばあさんがコーヒー豆をひきはじめると、ドンドンと、ドアをたたく音が聞こえました。

「ここは、モッコちゃんのコーヒー店ですか」

聞きおぼえのある声でした。

ドアをあけたおばあさんの顔を見て、わかいころのおじいさんは、ちよつと不思議そうな顔をして、
部屋に入りました。

「はあ、これがモッコちゃんのコーヒー店ですか。実は今朝、おかしなことがありましてね。ぼくが

顔を洗って、鏡をのぞきこんだら、うしろにドアがうつっていました。コーヒー店のかんばんをぶらさげたぬいぐるみが、ドアのすきまからのぞいていました。それで、いそいでタオルで顔をふいて、もう一度見たら、もう何もうつっていなかったんです。でも一日中、不思議な気分がつづいていました。ドアのむこうに、何か新しい幸せがかくれているような、そんな気持ちでした。

だから、さつき仕事から帰ってきて、手を洗っていて、また鏡の中にドアを見つけた時には、とてもあわてましたね。ドアよ消えるな、といいながらふりかえったら、このドアがちゃんとあったんです」
わかいころのおじいさんは、手にはタオルをもったまま、足には自分のスリッパをつっかけたままです。

「コーヒー豆をひき終わったおばあさんは、アルコールランプに火をつけました。

むかい合ってすわると、おばあさんは、ついこのあいだまでこうしておじいさんとすごしていたことを、せつなく思い出しました。

わかいころのおじいさんは、つづけます。

「ぼくは、今はしがたない中学の教師ですがね、いつか、りっぱな絵かきになりたいと思っています。ぼくは今、かわいい女性に恋をしてましてね。いやあ、その人に結婚を申しこみたいのだけれど、ことわられるのがこわくて、いい出せないでいるのです」

おばあさんは、やさしくほえんでいました。

「私には、ちょっと不思議な力があるのでね、その女の人のことがすっかり分かるよ。その人は、あなたのことをとっても愛しているよ。だいじょうぶ、一日も早く申しこみなさい」

わかいころのおじいさんは、はずかしそうに、でもうれしそうに、手で首すじをこすりました。

おばあさんは、おじいさんが長いあいだ使っていたカップに、コーヒーをいれました。それから、ふたりに熱いコーヒーをのみました。

「うまい！ ぼくも結婚したら、夜八時に、こうしてコーヒーをいれてのむことにしよう」
それから、じつとおばあさんの顔を見つめていました。

「さつきから、ずっと気になっていたので、おばあさんは、その人にとってもよくにている。こうしてむかい合ってすわっていると、その人といっしょにいるような気がしてくるくらいです。だけど、ちがうところがひとつだけあるんですよ。何だと思えますか？ 眼なんです。おばあさんの眼が、過去ばかり見つめているのが、ぼくにはよく分かりますよ。あの人の眼は、いつも未来を見つめて、明るく希望にもえているんだ」

「そりゃあ、わかいからだよ」

おばあさんは、さびしそうなほえみをうかべました。

「いいえ、あの人は、としをとつても、希望を失うような人じゃありません」

「だけど、愛する人が死んでしまったあとでも、その人は希望を失わないだろうかね」

「もちろんそうです。ぼくには分かりません。あの人は、いつまでもメソメソなんかしていません。きっと、死んだ人の分まで明るく生きてくれる人です。そんな人だから、ぼくはすきなんだ」

「まあ、ぞつこんなんだね。ホホホホ」

「いやあ、おばあさんがわらつてくれたから良かった。ぼく、おばあさんの不思議な力を信じて、あの人に結婚を申しこむぞ。いそいで帰って、手紙をかかなくちゃ。ありがとう、おばあさん。コーヒーごちそうさま。お元気で！」

それだけいうと、わかいらのおじいさんは、あつという間に、ドアの向こうへ消えてしまいました。

おばあさんは、思わずろうかまでおいかけてました。でもそこには、ただ暗い夜が、しんと広がっているだけでした。

おばあさんは、もう一度いすにすわりなおすと、モッコちゃんをひざにできました。

「おまえのコーヒー店は、なんて素晴らしいんだろかね。なんだか知らないけれど、私にも希望がわいてきたよ」

おばあさんは、ドアの上のしょうぞう画をはずして、大事に押し入れにしまいました。

それから、しまいこんであったおじいさんの絵の道具をひっぱり出しました。

イーゼルを組みたて、白いキャンバスをのせました。

「私にだって、かけるんじゃないかね」

おじいさんがやっていたのを思い出しながら、絵の具をときました。

かきはじめた絵は、モッコちゃんでした。何日かかかって、モッコちゃんの絵が出来上がると、またもつとかきたくなりました。おじいさんの使い残しのスケッチブックを持つと、すっかり冬景色になった外へ、スケッチにでかけるようになりました。

いっしんに絵をかいていると、以前おじいさんがいつていたことばが、おばあさんの心の中にしみじみとよみがえってきます。

絵をかいていると、心がわきあがってくる。うまくかけないと苦労するが苦労をのりこえていくと、ますます心がわきあがってくる。心の分量がふえるって感じだね……。

季節は、一步一步春にちかづいていました。

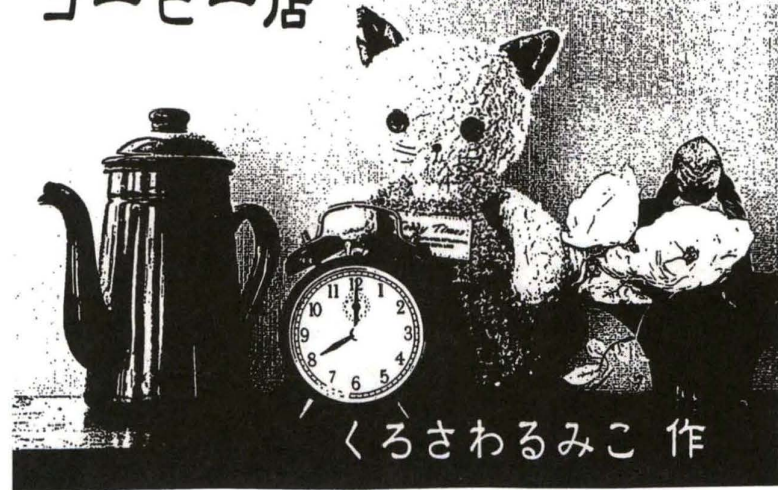
そして、いつかおばあさんの胸の中にも、花のかおりのする春風の女の人のような、やさしいあかりがほんのりともりはじめていました。

(おわり)

童話『モッコちゃんのコーヒー店』

が生まれるまで

モッコちゃんの コーヒー店



くるさわるみこ 作

私は、子どもの頃からぬいぐるみや人形を作るのが大好きでした。大人になって自分の子どもが生まれると、子どものために童話を書いたり、ぬいぐるみを作ったりするのがますます好きになりました。童話の会にも入りました。

その会で出会ったYさんは、ご主人が大学の教授で、Yさんご夫妻にはお子さんがありませんでしたが、童心に満ちた楽しい生活をされていました。私は、Yさんのために猫のぬいぐるみを作ってプレゼントしました。すると、Yさんはすぐに「モッコちゃん」という名前をつけて、とても可愛がり、私と会うときにはいつもモッコちゃんを大きなかばんに入れて連れてこられました。

Yさんは「モッコ」という名前は、本当は『もくこ』と言って沈黙の黙という字を書くのよ」と言われました。私は、なんてぬいぐる

みにびつたりの名前だろうと心底感心したものです。

そしてある日、Yさんから「モッコちゃんがコーヒー店を開いたので、遊びに来て下さいね」という葉書をいただきました。

勿論実際にコーヒー店を開かれた訳ではありませんが。

(完)

人生で一番楽しかったときっていつ？

二十七回生 萩原 直大

あなたは、今までの人生の中で

いつが一番楽しかった？

今が一番だよ

ちよっとキザじゃない？

私は黙って肯く

楽しかったこと 苦しかったこと

こころトキメイタこと 辛かったこと

個々の比較なんてできないし

過去は戻ってもこない

終わったことはもうお仕舞い

じゃあ未来は？

未来っていつのこと？

まさか明日や十日後じゃないよね

五年後や十年後だとすると

私はこの世にいるだろうか？

モッコちゃんのおばあさんだつて

二度とおじいさんの肖像画を

ドアの上にかけることはない

今日もスケッチブックを小脇にかかえ

「今が一番よ おじいさん」と